特別史跡安土城跡の調査から(1)上

1

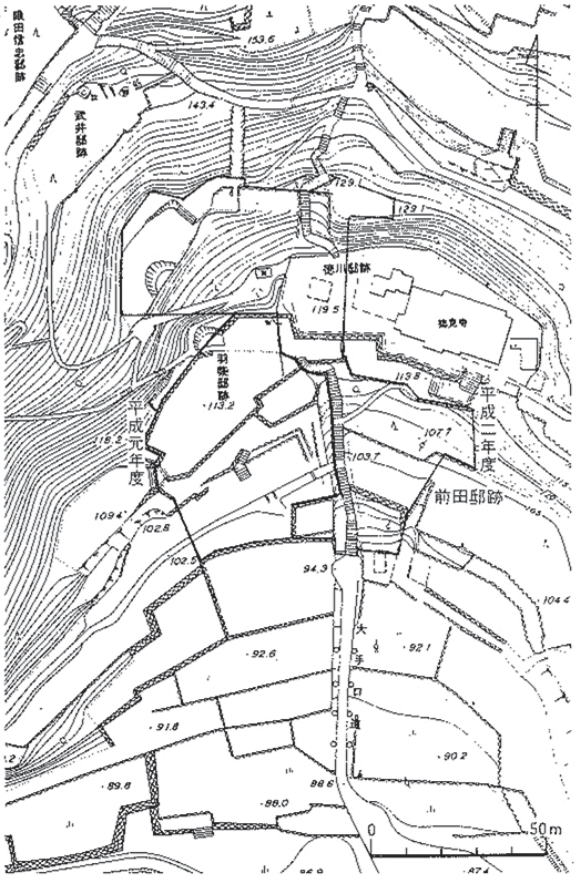
安土城は織田信長が天下統一をめざすため交通の要である安土に築いた城として良く知られています。３面を内湖に囲まれた安土山に、天正４年（1576）城を築き始めます。城は石垣を多用した平山城で山頂には天主をもち、今も山のいたるところに「郭」とよばれる家臣の屋敷地をみることができます。眼下には城下町を備え、街道を通し計画的な町づくりにとりくんでいたことがうかがえます。

しかし、天正10年（1582）明智光秀の反乱により、天下統一を目前に信長は敗れ天主は灰燼に帰し、安土城は廃墟と化していきます。

この安土城は中世から近世への変革期に出現する城郭で、近世城郭の先駆けとして、さらに当時の文化の粋を集め「安土文化」を代表するものといわれています。そこには、日本歴史上あらゆる分野の研究にとって貴重な資料が凝縮され、日本を代表する遺跡として大正15年10月20日に国の史跡に、さらに、昭和27年３月29日に特別史跡に指定されています。また、安土城跡と何らかの形で日常生活を共にしている人々にとって、安土城跡は憩いの場であり、シンボルにもなっています。

しかしながら、これまで安土城や信長に関する研究は行われてきましたが、安土城の実態は充分に把握されているとはいえず、大半は樹木竹におおわれ、石垣の崩壊など国民的

特別史跡安土城跡および史跡観音寺城跡位置図



平成元・２年度発掘調査範囲図

1991．９．１

財団法人　滋賀県文化財保護協会

文化遺産としての対応が十分なされないまま、現在にいたっています。このため、滋賀県では考古学をはじめ文献史、造園史、建築史などからの調査を行い、その実態を明らかにし成果を後世に正しく伝えるとともに、訪れる人々が理解しやすく、また、自然との調和を図る整備を長期的・計画的に進めることにしました。

安土城跡の歴史については当シリーズ第63号がありますので、ここでは、平成元年度から始めました発掘調査の成果を中心に説明します。

2

発掘調査は安土山の南側にあります大手道周辺から始めました。元年度は大手道の左側に広がる伝羽柴秀吉邸跡の約６ヵ所ある郭のうち４ヶ所で調査を行い、上部からＡ～Ｄ区と番号を付しました。２年度は伝羽柴秀吉邸跡虎口と伝前田利家邸跡や伝徳川家康邸跡、大手道の調査を行いました。伝前田利家邸跡は約８ヶ所の郭のうち４ヶ所（Ａ～Ｄ区）で、伝徳川家康邸跡では約４ヶ所の郭のうち２ヶ所（Ａ・Ｂ区）で、大手道は伝徳川家康邸跡に接するところまでをそれぞれ行いました。

(1)　伝羽柴秀吉邸跡

Ａ区

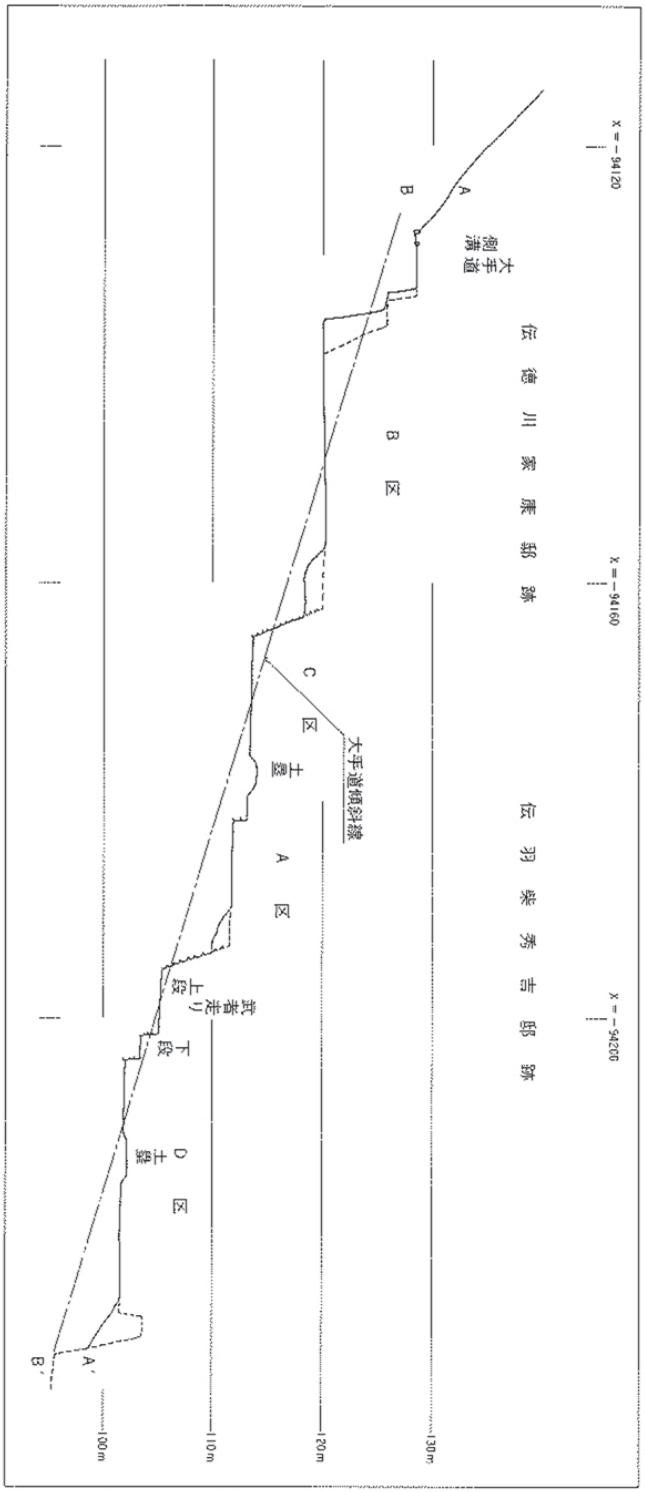
大手道に接する郭で、東西約15ｍ、南北約12ｍの規模をもち、大手道とは石土居により遮断されています。西側にはＢ区があり境界の石垣は１～２段しか残っていませんが、もとは３～４段積まれ、高低差は約２ｍあったと推定されます。

伝羽柴秀吉邸跡　Ｂ区　礎石建物

建物跡は明らかではありませんが、北側に礎石状の石があります。なお、ここを南北方向に流れる水路は近代につくられたものです。

Ｂ・Ｃ区

伝羽柴秀吉邸跡の最上部に位置する郭で、

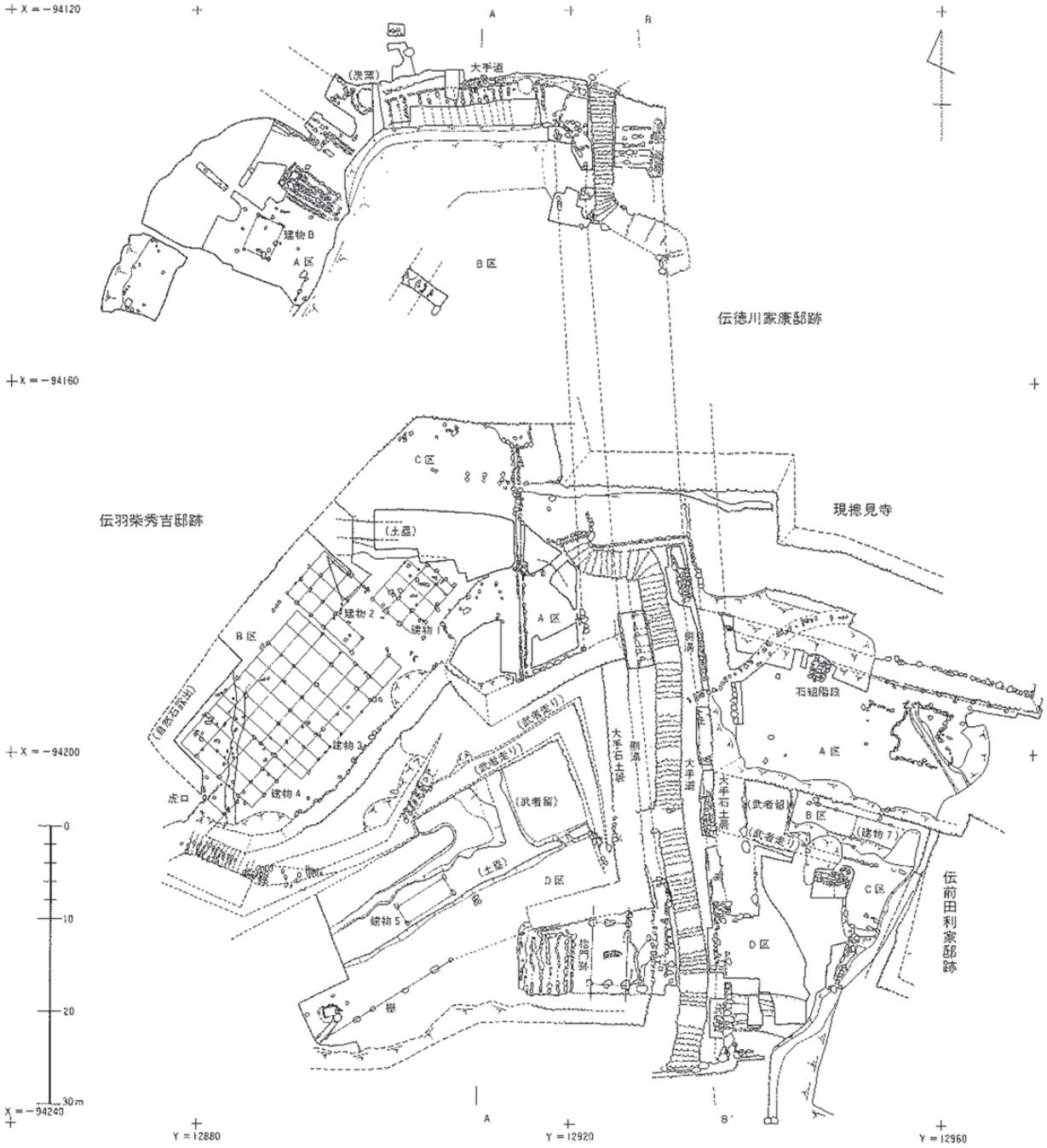


伝徳川家康邸跡・伝羽柴秀吉邸跡・
大手道断面（Ｙ＝12910）および大手道傾斜線

現在天主へつづく山道で分断されていますが、もとは１つの郭と考えられます。規模は約54ｍ×約20ｍの約1,080㎡あり、Ｂ区に約４棟の建物を配置します。大手道からの出入りに関連する施設は明らかではありませんが、反対の南西隅に入口（虎口）をもち、下のＤ区とは階段で結ばれています。

山手は石垣を約20石（高さ約６ｍ）積み上げます。石垣の南側約10ｍは岩盤が露出しており、最初から石垣を積まず、自然石をみせていたようです。なお、現在の山道は石垣の崩壊部分を通っています。

建物は礎石を用いた礎石建物（そせきたてもの）です。建物１は３間×３間（5.6ｍ×5.9ｍ）に庇状（ひさしじょう）の突出部をもちます。建物２は３間×３間（6.1ｍ×5.3ｍ）に南へ張り出す施設をもち、この建物跡から瓦が出土します。建物３は７間×６間（13.3ｍ×12.6ｍ）に南東隅に玄関とみられる張り出し部をもちます。この建物は４棟の中で最も規模は大きく、大広間のある主殿的



平成元・２年度発掘調査平面図

建物と考えられます。建物４は４間×３間（10.5ｍ×6.1ｍ）の規模をもち、建物３と接します。

南西隅の入口は間口約2.7ｍを測り、門を設けています。また、谷側の石垣上端部には他より大き目の礎石を等間隔に置き、ここに塀を設置していた可能性があります。

礎石の石材は40～50㎝の自然石を用い、中には方形に加工したものもあります。

Ｃ区は東西方向にのびる土塁状の高まりでＢ区と分けられています。内部からは建物跡などは確認されませんでした。

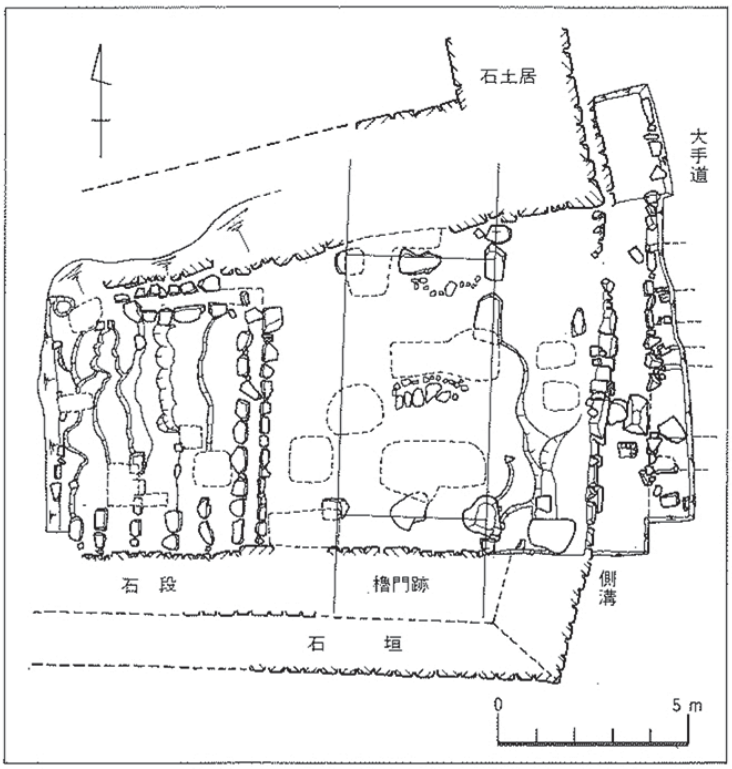
Ｄ区

伝羽柴秀吉邸跡の最下段にあります東西約70ｍ、南北約20ｍの郭で、Ｂ区より約８ｍ低く、石垣は２段に積み上げています。段には通路（武者走り）をつくり、Ｂ区へ続く階段とつながります。

郭はＴ字型の土塁状高まりにより３つの区画に分かれ、土塁状高まりの上に１間×１間（６ｍ×2.1ｍ）の礎石建物を１棟建てています。大手道に面する区画は武者溜りの可能性があります。郭の南西隅には小さな石を長方形（1.3ｍ×１ｍ）に並べた施設があり、この付近から土師器皿片などの出土を多くみることなどから、ここに祠的な建物を推定できます。

土塁状高まりと平行して南側に礎石が並びます。特に中央の２石は１辺１ｍと大きく、

伝羽柴秀吉邸跡 虎口 櫓門跡



伝羽柴秀吉邸跡（虎口）櫓門跡平面図　◯＝立木

門（冠木門カ）の存在した可能性があり、その横の礎石は柵とみられます。柵は東側の石土居と接続しており、その下に虎口があります。

虎口

伝羽柴秀吉邸跡の南東隅に位置し、大手道からの入口にあたります。東西約14.5ｍ、南北は入口幅約９ｍ、奥側の幅約７ｍの規模をもち、ここから櫓門跡と石段を検出しました。

櫓門跡は鏡柱と脇柱の礎石７個が完存し、両側の石垣に添って寄掛柱を建てる礎石２個もあります。正面は大扉（柱間約5.1ｍ）とむかって右側に脇戸（柱間約1.5ｍ）の３間構造で、染間は２間（柱間各約1.95ｍ）です。この礎石の配置、両側の石垣の存在、瓦の出土などから上層を渡り櫓とする脇戸付櫓門といえます。

門を入ると７段の石段があり、山手から石段の下へＬ字状につづく石組溝を備えています。石段は0.6～0.9ｍの踏面に約0.2ｍの蹴上りです。なお、石段下の溝は櫓門の雨落溝を兼ねていたようです。（葛野　泰樹氏　提供）